

Catalytic Hydrogenation of Aromatic Compounds in Aqueous Ethanol Solution without External Hydrogen

Masayuki Shirai ^{a, b} *, Kenkichi Taniguchi ^a, Etty N. Kusumawati ^a, Aritomo Yamaguchi ^b Chemistry course, Faculty of Science and Engineering, Iwate University, 4-3-5 Ueda, Morioka, Iwate 020-8551, Japan mshirai@iwate-u.ac.jp Research Institute for Chemical Process Technology, National Institute of Advanced Industrial Science and Technology, 4-2-1 Miyagino, Sendai, Miyagi 983-8551, Japan

Catalytic hydrogenation to obtain valuable chemicals is an important transformation process in the chemical industry. Raw chemicals in the process rely on fossil resources, such as oil and natural gas. As alternative energy resources, the utilization of woody biomass is indispensable for the development of sustainable valuable chemicals production. We show the development of supported noble metal catalysts for hydrogenation of aromatic compounds, model compounds of lignin, in aqueous ethanol solution, which can be obtained from bioethanol, without using external hydrogen gas.



Keyword: Hydrogenation in aqueous ethanol solution, hydrogenation of aromatic compounds, hydrogenolysis of furans, biomass conversion

Masayuki Shirai has been a professor at lwate University since 2013. He received a Ph. D. from the University of Tokyo in 1993 and started his carrier as a research associate at Tohoku University 1993 and promoted to associate professor at Tohoku University in 2002. He moved to National Institute of Advanced Industrial for Science and Technology (AIST) as a team leader in 2002. His main research is catalytic reactions in high-temperature and high-pressured water and/or carbon dioxide solvents.

Kenkichi Taniguchi is a doctor course student at lwate University. His interest is biomass conversion in water and/or carbon dioxide under high-temperature and high-pressure conditions.

Etty N. Kusumawati received a Ph.D. from the University of Tokyo in 2018. After working as postdoctoral fellow at Hokkaido University, she became a research associate at lwate University in 2021. Her research interest is solid catalyst development for green chemical processes.

Aritomo Yamaguchi got his Ph.D. in Chemistry, Graduate School of Science, University of Tokyo in 2001. From 2001 to 2005, he was a research associate at Tokyo University of Science, then, he became a postdoctoral researcher in University of California at Berkeley. He moved to National Institute of Advanced Industrial Science and Technology (AIST) in 2007. Since 2014, he has been a group leader in Research Institute for Chemical Process Technology, AIST, Japan.



1

エタノール水溶液を用いる芳香族化合物の水素化反応

白井誠之^{*,b},谷口賢吉^{*}, Etty N. Kusumawati^{*},山口有朋^b **岩手大学 理工学部 化学・生命理工学科 化学コース* b 産業技術総合研究所 化学プロセス研究部門

1. はじめに

20世紀の化学工業の発展により、石油を原料 として効率的な化成品の製造が可能となった。 化成品原料は限りある化石資源から主に製造さ れているのに対し、世界の人口は増加し続けて いる。食料やエネルギーのみならず持続可能な 物質生産のために、再生可能資源を用いる化 成品原料合成が望まれる。水と二酸化炭素と太 陽エネルギーで得られる木質系バイオマスが最 も有望な再生可能資源であり、エネルギー利用 を目的としたバイオエタノール製造とともに化成 品原料合成のための触媒化学プロセス研究が 広く行われている。¹⁷

木質系バイオマスはセルロース、ヘミセルロース、リグニン部位からなる。セルロースは六炭糖が重合した構造を、ヘミセルロースは六炭糖と 五炭糖が重合した構造をとり、加水分解反応や 脱水反応により、多価アルコール、カルボン酸、 ラクトンなどが得られる。⁸⁻¹³リグニンはプロピルフ ェノール類がランダムに縮重合した構造をとる。 リグニンの部分分解反応によりアルキルフェノー ルやフラン環を有する芳香族化合物が得られ、 それらを水素化、水素化分解、脱酸素化などに より化成品原料が得られる。木質系バイオマス からの化成品原料合成のため触媒研究が広く なされている。¹⁴⁻¹⁹ 化学変換触媒プロセスにお いて人体や環境への負荷が小さいグリーンな溶 媒の利用が望ましい。^{20,21}

リグニンはプロピルフェノール類が縮重合した 構造を有し、部分分解によりフェノール類が得ら れる。フェノール類の芳香環の水素化反応によ り得られるシクロヘキサノール類やシクロヘキサ ノン類は高分子原料、医農薬中間体などに広く 用いられる。水素化反応には水素ガスが用いら れているが、水素ガスは化石資源から得られて いる。セルロースから得られるバイオエタノール (エタノール水溶液)を水素ガスの代用とするこ とにより再生可能資源を用いる水素化反応プロ セスが可能となる。本稿ではセルロースの糖化 と発酵により得られるバイオエタノール(エタノー ル水溶液)を利用して、リグニンから得られる芳 香族化合物を水素化および水素化分解し化成 品原料へと変換する触媒システム(Figure 1)に ついて紹介する。

2. 高温のエタノール水溶液による触媒反応

本稿で示す実験は250~350℃、~20 MPaの 高温高圧条件で行う。その際、昇温および降温 過程中における副反応を抑える必要がある。



Figure 1. Hydrogenation and hydrogenolysis of biomass-derived chemicals in aqueous ethanol solution.

筆者らの作成した反応装置をFigure 2 に示す。 ステンレスチューブ反応器(Figure 2(b))を流動 砂浴(Figure 2(a)右)と水浴(Figure 2(a)左)で 急速昇温および急速冷却することで反応温度を 制御している。^{22,23}反応器をアームに取り付け、 砂浴と水浴の間の移動、浴の出し入れをリモー トで行う。反応器の内容積はチューブの長さに より調整できる(本稿では主に内容積 6 cm³の反 応器を用いた結果を示す)。チューブの肉厚は 強度計算をもとに決める。チューブの一端を閉 じ、もう一端に耐圧バルブを取り付ける。

実験では、反応器内に所定量の基質と触媒、 更に溶媒(水およびエタノール量はそれぞれ 0 ~3 mL)を入れたのち、窒素で反応管内を置換 した。反応後、反応器内から回収された気体生 成物の体積を測定し、GC-TCDを用いて定量分 析した。反応管内から回収された液体生成物は GC-FID で分析した。



Figure 2. Apparatus (a) and SUS tube reactor (b) for reactions under high-temperature and high-pressure conditions.

3. 芳香族類の水素化反応

3.1 4-プロピルフェノールの水素化反応

エタノール水溶液を用いるフェノール類の水 素化反応として、炭素数3の置換基を有する4-プロピルフェノール(4PP)について検討した結 果を示す。

エタノール水溶液による水素化反応に活性な 触媒探索を行った。金属触媒は、一般に金属 微粒子を高分散させるためにシリカ、γ-アルミナ、 活性炭などの表面積の大きな担体に担持して 用いる。しかし高温水中においてシリカは溶解 すること、γ-アルミナはベーマイトになるため担 持金属種が溶液に溶けだしてしまう。²² このため 炭素系の担体を用いる必要がある。水素化反応 に優れた金属種の探索のために、種々の市販 の活性炭担持貴金属触媒を用いた 4-プロピルフェノールの水素化反応を行った結果を Table 1 に示す。²³ どの活性炭担持金属触媒上でも、 エタノールが分解して水素、一酸化炭素、メタン、 二酸化炭素、エタンを生成するが、活性炭担持 パラジウム触媒(Pd/C(Wako))のみが、4PP の水 素化反応に活性を示し、芳香環の水素化反応 (核水素化反応)による4-プロピルシクロへキサ ノン(NONE)と cis-および trans-シクロへキサノ ール(NOLs)と、エタノールが 4PP と反応したエ チルプロピルフェノール(EPP)生成した。水素 生成には Pt/C が最も活性を示したが 4PP の水 素化反応には活性を示さなかった。

Table 1.	Products in 4-propy	/lphenol
hydrogen	ation over activated	carbon supported
catalyst. ª)	

	Gaseous products/ mmol			Liquid F	Products/ mm	nol	
	H ₂	H ₂ CO CH ₄ CO ₂			None	NOLs	EPP
Pd/C(Wako)	0.85	0.23	0.79	0.54	0.18	0.045	0.015
Pt/C(Wako)	3.3	0.32	2.1	1.6	0	0	0
Rh/C(Wako)	0.93	0.84	2.3	1.5	0	0	0
Ru/C(Wako)	0.38	2.3	5.3	3.0	0	0	0

^{a)} React. Time 60 min, react. temp. 573 K, 4PP 0.74 mmol, catalyst 0.15 g, H₂O 2 mL, C₂H₅OH 1 mL.

水/エタノール比が水素化反応に与える影響 を Figure 3 に示す。水溶媒では水素は生成せ ず、水素はエタノールの分解により生成する。 水素量はエタノール量ともに増加しエタノール 分率 0.6(水 0.5 mL、エタノール 2.5 mL)以上で は、ほぼ一定となる。水素生成はエタノールの 分解により進行するためである。一方 4PP の水 素化反応はエタノール量とともに増加したがエ タノール分率 0.13(水 2 mL, エタノール 1 mL) で最大となった。またエタノール分率が大きいと エチルプロピルフェノールが生成し 4PP のアル キル化反応が副反応としておこることが示された。

比較のため水溶媒と気相水素を用いる Pd/C(Wako)による水素化反応を行った結果回 収された水素量および液体生成物量を Table 2 に示す。水溶媒と1 MPaの水素ガスの組み合わ せでは Pd/C(Wako)上で 4PPの水素化反応は進 行しなかった。導入水素量を3 MPaとすると 4PP の水素化反応が進行したが、NONE および



Figure 3. 4PP hydrogenation over Pd/C in aqueous ethanol solution (reaction temperature 573 K, reaction time 60 min.)

NOLsの収量はエタノール水溶液を用いる場合 よりも低かった。また水溶媒ではプロピルベンゼ ン(PB)が副生した。エタノールや n-ヘプタン溶 媒と気相水素との組み合わせでは、EPP や PB が多く副生しアルキル化反応や脱水酸基反応 が起こる。高温のエタノール水溶液を用いること で 4PP を効率的に水素化できる。

573 Kエタノール水溶液とパラジウム触媒を用いる水素化反応では、エタノールがパラジウム上で分解し、生成した水素により4PPの芳香環が水素化され NONE や NOLs が生成する (Scheme 1)が、水素化反応には水溶媒も必要である。

最適な触媒開発を目的として、炭素担体およ びパラジウム担持量依存性を調べた。炭素担体 としては活性炭(C)および高表面積黒鉛

Table 2.	Hydrogen	and li	iquid	products	from	4-
nronvlnhe	nol hydrode	natior	n ove	r Pd/C in	water	a)

P P. J. P	.,							
Solvent and H ₂	Recovered	Liquid Products/ mmol						
pressure	hydrogen / mmol	NONE	NOLs	РВ	EPP			
H ₂ O +1 MPa	0.83	0.0	0.0	0.012	0			
H ₂ O +3 MPa	3.3	0.032	0.014	0.041	0			
C₂H₅OH +3 MPa	4.7	0.0047	0.0088	0	0.062			
<i>n</i> -C ₇ H ₁₆ +3 MPa	3.2	0.081	0.034	0.38	0			

^{a)} React. Time 60 min, react. temp. 573 K, 4PP 0.74 mmol, catalyst 0.15 g.





(HSAG)を担体とした。触媒は塩化パラジウム の含浸担持と水素化ホウ素ナトリウムによる還元 により行った。²⁴

1wt%以下のパラジウムを担持した活性炭担 持触媒では 4PP の水素化活性 (NONE + NOLs) を示さなかった。1wt%以上のパラジウム担持で は担持量に比例して水素化活性が増大した。 高表面積黒鉛担持パラジウム触媒では担持量 0.2wt%から活性を示し 1wt%のパラジウム担持 まで担持量とともに活性が増大し 1wt%以上で は担持量とともに緩やかに減少した。1wt%およ び 5wt%のパラジウムを担持した触媒(1Pd/C, 5Pd/C, 1Pd/G, 5Pd/G) についての 4PP 活性を Table 3 に、反応後の触媒の表面積、細孔容積 そして粒子サイズを Table 4 に示す。 パラジウム の粒子サイズは、担体の種類および担持量によ り大きくは変化しない。一方、高表面積黒鉛担 持触媒に比べ活性炭担持触媒は表面積及び 細孔容積が非常に大きい。両担体の表面積と 細孔容積の違いから、活性炭担持触媒におい て、パラジウム微粒子は活性炭内の細孔に分散

Table 3. Hydrogen and liquid products from 4-propylphenol hydrogenation over activated carbon and graphite supported palladium catalysts in water $^{a)}$

Catalysts	Gaseous products/ mmol	Liquid Products/ mmol		
	H ₂	NONE	NOLs	EPP
1Pd/C	0.11	0.0056	0.00089	0.002
5Pd/C	0.45	0.081	0.0096	0.0048
1Pd/HSAG	0.69	0.073	0.089	0
5Pd/HSAG	0.56	0.11	0.022	0.00081

 $^{a)}$ React. Time 60 min, react. temp. 573 K, 4PP 0.74 mmol, catalyst 0.15 g, H_2O 2 mL, C_2H_5OH 1 mL.

し、高表面積黒鉛担持触媒では表面近傍にパ ラジウムが存在していることが、4PP 分子のパラ ジウム粒子へのアクセスの違いとして現れた一 因と考えているが、担体表面の含酸素官能基量 やパラジウム粒子の電子状態など更なる構造解 析が必要である。

 Table 4.
 TEM and N₂ adsorption-desorption

 analysis of supported palladium catalysts ^{a)}

Catalysts	TEM analysis	N ₂ adsorption-desorption analysis	
	average size ^{a)} /	surface area /	Pore volume/
	nm	m ² g ⁻¹	cm ³ g ⁻¹
С	-	1448	1.39
G	-	294	0.52
1Pd/C	4.3	1364	1.27
5Pd/C	5.5	1323	1.20
1Pd/G	3.2	282	0.52
5Pd/G	4.8	266	0.49

^{a)} Determined by $d_{ave} = \Sigma nd_i^3 / \Sigma nd_i^2$, n: number of particle size, d_i: diameter size of each particle.

担持金属触媒では活性の異なる複数の金属 種の担持により単独の金属担持触媒とは活性 が大きく変化することが知られている。4PP の水 素化反応には活性を示さなかったがエタノール からの水素生成には高い活性を示した白金を パラジウムとともに共含浸担持した。バイメタル 触媒による 4PP 水素化活性を Table 5 に示す。 1wt%の白金を高表面積黒鉛に担持した触媒は 担持パラジウム触媒よりも高い水素生成を示し たが 4PP 水素化反応には活性を示さなかった。 パラジウムと白金を共含浸した触媒はパラジウ

Table 5.	Hydrogen and liquid products from 4-
propylphe	enol hydrogenation over graphite
supported	d catalysts in water ^{a)}

Catalysts	Gaseous products/ mmol	Liquid Products/ mmol		
	H ₂	NONE	NOLs	EPP
1Pd/HSAG	0.41	0.0060	0.029	0
1Pt/HSAG	0.85	0	0	0.016
0.25Pt1Pd/HSAG	0.81	0.096	0.16	0.0047
0.5Pt1Pd/HSAG	1.7	0.052	0.26	0
1Pt1Pd/HSAG	1.7	0.074	0.31	0.0027
2Pt1Pd/HSAG	2.1	0.053	0.27	0.0031

 $^{a)}$ React. Time 30 min, react. temp. 573 K, 4PP 0.74 mmol, catalyst 0.15 g, H_2O 2 mL, C_2H_5OH 1 mL.

ム触媒よりも高い水素化活性を示した。水素化 活性は白金量に依存し 1wt%の白金と 1wt%の パラジウムを担持した触媒(白金とパラジウムの 原子比 1:2)が最も高い活性を示した。

自金とパラジウムの担持状態を調べるた めに反応後の触媒について EXAFS を測定し た(Table 6)。^{25,26} 共含浸触媒では Pd-K edge EXAFS および Pt L_{III}.edge EXAFS においてパ ラジウムと白金の結合が観測され合金が形成さ れていることがわかる。1Pt1Pd/G 触媒(白金とパ ラジウムの原子比は 1:2)において、白金とパラ ジウムが完全混合しているときは、配位数の比 N_{Pd-Pd} が N_{Pt-Pt}: N_{Pt-Pd} は 8:4:4:8 となること、 N_{Pd-Pd} が N_{Pt-Pt} よりも小さい値を示したことから、 バイメタル触媒では白金が内部にパラジウムが 表面に偏析している合金微粒子が形成されて いることが示される。

Table 6.	EXAFS analysis of graphite supported
catalysts	

Catalysts	Edge	Shell	R ^{a)} / nm	N ^{b)}
1Pd/HSAG	Pd K	Pd-Pd	0.274±0.004	7.7±0.9
1Pt/HSAG	Pt-L _{III}	Pt-Pt	0.275±0.005	11.6±1.9
	Pd K	Pd-Pd	0.273±0.003	5.1±0.8
		Pd-Pt	0.274±0.004	4.3±1.5
1Pt1Pd/HSAG		Pt-Pt	0.273±0.003	6.7±1.4
	Pt-L _{III}	Pt-Pd	0.272±0.002	3.2±0.9

^{a)} bond distance, ^{b)} coordination number

3.2 2-メトキシフェノール(グアイアコール)の 水素化反応

リグニンを構成するフェノール類として 2-メト キシフェノール (グアイアコール) がある。 グアイ アコールを水素化することで 2-メトキシシクロへ キサノン (MeNONE) および 2-メトキシシクロへキ サノール (MeNOLs) が得られる。(Scheme 2)。



Scheme 2. Guaiacol hydrogenation.

4-プロピルフェノール水素化反応に活性な 1Pt1Pd/G 触媒を用い、エタノール水溶液(水1 mL、エタノール 2 mL)中で 2-メトキシフェノー ル(グアイアコール)の核水素化反応を調べた (Table 7)。1Pt1Pd/G 触媒はエタノール中で活 性を示し、2-MeNONE、*cis*-および *trans*-MeNOLs が生成した(Table 7)。水溶媒と3 MPa の水素下では核水素化反応は進行せず、フェ ノール(Ph)が生成した。1Pt1Pd/G 触媒はエタノ ール水溶液によるグアイアコールの水素化反応 に有効であることが示された。

Table 7. Hydrogen and liquid products from guaiacol hydrogenation over 1.0Pt1.0Pd/G ^{a)}

Solvent	H ₂	MeNONE	MeNOLs	Ph
	/ mmol	/ mmol	/ mmol	/ mmol
H ₂ O 1 mL + C ₂ H ₅ OH +2 mL	3.0	0.040	0.34	0.0021
H ₂ O +3 MPa	3.6	0	0	0.13

^{a)} React. Time 60 min, react. temp. 573 K, guaiacol 0.81 mmol, catalyst 0.1 g.

3.3 ベンゾフランの水素化分解反応

リグニンには、フラン環を有する部位が存在 する。フラン環構造を有するモデル化合物であ るベンゾフラン(BF)を水素化分解することにより、 接着剤や食品添加物に用いられる o-エチルフ ェノール(EP)が得られるが、BF の水素化分解 反応では水素化反応も進行しジベンゾフラン (DBF)も生成する。(Scheme 3)。



Scheme 3. Hydrogenolysis of benzofuran

Table 8. Hydrogen and liquid products frombenzofuran hydrogenolysis in water a)

	H ₂ / mmol	EP/ mmol	DBF/ mmol	Ph/ mmol
Pd/C	0.0017	0.0040	0.11	0.0070
Pt/C	0.92	0.13	0.37	0.0080
1Pt/KS	0.29	0.30	0.038	0.0080
1Pt/KS ^{b)}	2.6	0.11	0.069	0.020
1Pt/HSAG	0.43	0.082	0.12	0.0060

^{a)} React. Time 60 min, react. temp. 523 K, 0.85 mmol, catalyst 0.125 g, H_2O 2 mL, C_2H_5OH 1 mL. ^{b)} 2.0 mL of water and 3 MPa of hydrogen.

エタノール水溶液による BF の水素化分解反 応に活性な金属種および担体種の探索結果を Table 8 に示す。27 市販の活性炭担持貴金属触 媒ではパラジウム触媒(Pd/C)と白金触媒(Pt/C) が活性を示し、水素化分解反応によりEPと水素 化反応により DBF が得られた。また、含酸素複 素環の水素化分解には Pt/C の方が高い活性を 示した。塩化白金アンモニウムを前駆体として、 表面積の異なる黒鉛粉末に 1wt%の白金微粒 子を担持した触媒を調製した(1Pt/KS, 1Pt/HSAG)。エタノール水溶液を用いるベンゾ フランの水素化反応を行った。黒鉛担持の2種 の触媒において白金の粒子サイズは同程度で あるが、表面積の小さい黒鉛粉末に担持した 1Pt/KS 方が水素化分解反応に高い活性を示し た。また、1Pt/KS 触媒とエタノール水溶液との組 み合わせは、水溶媒と気相水素との組み合わ せよりも高い水素化分解活性を示した。表面積 の小さい黒鉛に担持した白金触媒では表面近 傍に白金微粒子が存在していることにより BF の 白金粒子へのアクセスの違いとなり、活性に差 が出たものと考えているが、粒子サイズ依存性 など、微粒子構造制御と活性との相間について 調べる必要がある。

Catalysts	average size ^{a)} / nm	surface area / m²g⁻¹	Pore volume / cm ³ g ⁻¹
1Pt/KS	5.5	18.9	0.112
1Pt/HSAG	5.9	313	0.563

 Table 9.
 TEM and N₂ adsorption-desorption

 analysis of supported palladium catalysts ^{a)}

^{a)} Determined by $d_{ave} = \Sigma nd_i^3 / \Sigma nd_i^2$, n: number of particle size, d_i : diameter size of each particle.

4. おわりに

本稿では、担持金属微粒子によるアルキルフ ェノールの水素化反応およびベンゾフランの水 素化分解反応を例としてエタノール水溶液を用 いる水素化反応を示した。バイオマスのみを利 用する化成品原料合成のために、更なる活性 の向上や、耐久性有する触媒開発そして経済 性の評価についても今後検討をしていく。

5. 謝辞

本稿で紹介した高温高圧下での実験は産業 技術総合研究所の佐藤修博士、岩手大学の七 尾英孝准教授、永澤佳之博士をはじめ多くの皆 様の協力によって行われました。本研究は科学 研究費補助金(18H03421)で支援されました。 本研究で示した放射光を用いた実験はフォトン ファクトリーの共同利用実験課題(2018G057)と して行われました。この場を借りてお礼申し上げ ます。

参考文献

- G. W. Huber, S. Iborra and A. Corma, *Chem. Rev.*, **2006**, *106*, 4044-4098.
- A. Corma, S. Iborra and A. Velty, *Chem. Rev.*, 2007, 107, 2411-2502.
- J. J. Bozell and G. R. Petersen, *Green Chem.*, 2010, 12, 539-554.
- J. Zakzeski, P. C. A. Bruijnincx, A. L. Jongerius and B. M. Weckhusen, *Chem. Rev.*, 2010, *110*, 3552-3599.
- C. O. Tuck, E. Pérez, I. T. Horváth, R. A. Sheldon and M. Poliakoff, *Science*, 2012, *337*, 695-699.
- C. Li, X. Zhao, A. Wang, G. W. Huber and T. Zhang, *Chem. Rev.*, **2015**, *115*, 11559-11624.
 - 7). S. Gillet, M. Aguedo, L. Petitjean, A. R.

C.

Morais, A. M. da Costa Lopes, R. M. Łukasik and P. T. Anastas, *Green Chem.*, **2017**, *19*, 4200-4233.

- A. Yamaguchi, N. Mimura, M. Shirai and O. Sato, *J. Jpn. Pet. Inst.*, **2019**, *62*, 228-233.
- A. Fukuoka, P.L. Dhepe, *Angew. Chem. Int. Ed.*, **2006**, *45*, 5161-5163.
- 10). C. Luo, S. Wang, H. Liu, *Angew. Chem. Int. Ed.*, **2007**, *46*, 7636-7639.
- S. Van de Vyver, J. Geboers, M. Dusselier, H. Schepers, T. Vosch, L. Zhang, G. Van Tendeloo, P.A. Jacobs, B.F. Sels, *ChemSusChem*, 2010, *3*, 698-701.
- A. Yamaguchi, O. Sato, N. Mimura, Y. Hirosaki, H. Kobayashi, A. Fukuoka, M. Shirai, *Catalysis Communications*, **2014**, *54*, 22-26.
- B. Sharma, C. Larroche, Claude-Gilles Dussap, *Bioresource Technology*, **2020**, *313*, 123630.
- 14). P. L. Dhepe and R. Sahua, *Green Chem.*, **2010**, *12*, 2153-2156.
- 15). Y. Kim, M. A. Jabed, D. M. Price, D. Kilin, S. Kim, *Chem. Eng. J.*, **2022**, *446*, 136965
- C. Li, J. Shi, K. Zhang, Y. Wang, Z. Tang, M. Chen, *Fuel*, **2022**, *315*, 123249
- 17). H. U. Kim, J. W. Kim, N. T. Tran, S. O. Limarta, J.-M. Ha, Y.-K. Park, J. Jae, *Energy Conv. and Manage.*, **2022**, *261*, 115607.
- Z. Zhang, Z. Li, H. Zhang, C. Ma, Z. Zhang, Y. Xie, S. Liu, Q. Wang, C. U. Pittman Jr., *Fuel Process. Tech.*, **2022**, 235, 107382
- 19). B. Zhang, W. Li, X. Li, *Indus. Crops and Products*, **2022**, *178*, 114608.
- 20). 白井誠之,山口有朋,日吉範人,佐藤修, *表面* 2012, 50 巻, 336-350.
- 21). A. Yamaguchi, J. Jpn. Petro. Inst. 2014, 57, 155-163.
- 22). M. Osada, O. Sato, K. Arai, and M. Shirai, *Energy Fuels*, **2006**, *20*, 2337-2343.
- Y. Nagasawa, H. Nanao, O. Sato, A. Yamaguchi, and M. Shirai, *Chem. Lett.*, 2016, 45, 643-645.

- 24). Y. Nagasawa, Y. Hiraishi, D. Horyo, T. Sobu,
 K. Taniguchi, H. Nanao, O. Sato, A. Yamaguchi, and M. Shirai, *Chem. Lett.*, 2021, 50, 431-434.
- 25). Y. Nagasawa, E. N. Kusumawati, H. Nanao,T. Sasaki, O. Sato, A. Yamaguchi, and M. Shirai, *Chem. Lett.*, **2021**, *50*, 1968-1971.
- 26). E. N. Kusumawati, D. Horyo, K. Taniguchi, H. Nanao, T. Sasaki, O. Sato, A. Yamaguchi, and M. Shirai, *Catal. Today, in press.*
- 27). Y. Hiraishi, N. Minakawa, K. Taniguchi, Y. Nagasawa, H. Nanao, C. V. Rode, O. Sato, A. Yamaguchi, and M. Shirai, *J. Ind. Chem. Soc.*, **2021**, *98*, 10021.